

「静かにたたずむ狛犬さん、ちょっとヤンチャ系の狛犬さん、狛犬さんにもいろんな性格がありますが、白河の狛犬さんは、『どうだ!』とばかりに自分の強さを誇示する迫力のある芸術作品がたくさんあります。狛犬さんを全霊込めて彫った作家の魂と周囲の神聖なスピリットといったエネルギーが渦巻いているのを感じます」

神獣をモチーフとする現代アーティストの小松美羽さんは、日本だけでなく世界中で活躍。そして、今回、白河の地を訪れ、狛犬を巡る旅にでました。

旅のきっかけは、2020年秋に行われた『福島ビエンナーレ2020「風月の芸術祭 in 白河」～祈～』という現代アートの芸術祭でした。「祈」をキーワードに、白河の歴史、文化に根づいてきた「狛犬・神獣」や「白河たるま」、神社仏閣や教会などの歴史的なものを重ねて展開する企画に、小松さんも作家の一人として出展。芸術監督を務めた渡邊晃一さんから白河の狛犬の歴史と作品の話聞き、大きな縁を感じたといいます。

小松さんは、狛犬を「狛犬さん」と呼びます。それは、子どものころからの実体験に関係していました。長野県の千曲川にほど近い自然豊かな場所で育った小松さんは、よく近所の山で遊んでいたそうです。「気がつくと茶色の毛をした犬がそばにいました。『山犬さま』と呼んだりして。夢中で遊んで道に迷ってしまっても、山犬さまが導いてくれました。親に話しても、そんなものいないと言われてしまう。でも、わたしのそばには確実にいました」

小松さんは、子どものころからずっと山犬さまに導かれてきたような感覚があると言います。作品の象徴として、狛犬をはじめとする神獣をモチーフに描きます。

「わたしの場合は、山犬さまという日本狼系から入って、猫科の獅子・狛犬につながっていくのですが、信仰や宗教に触れると、神様につかえる神獣がでてきます。悪いものを追い払って神聖なところへ導いてくれる、ものごとの本質的な豊かさや調和へ導く役割を担っているのかもしれない」

現代アーティスト

小松美羽 × 白河狛犬

プロフィール

1984年、長野県坂城町生まれ。現代アーティスト。2015年、有田焼の狛犬作品『天地の守護獣』が大英博物館へ永久展示。2017・2018年、台湾、香港、日本での個展は、観客動員数とセールス双方で新記録を樹立。2020年、日本の魅力を再発見して世界へ発信する雑誌『ディスカバージャパン』で特集が組まれた。趣味が狛犬研究というほど造詣が深く、狛犬をモチーフとした作品も多い。



石という自然の産物に、天才的な石工の技が調和 白河の狛犬美術は、生まれるべくして生まれた

福島県県南地方には、300対近い狛犬があります。狛犬以外にも地蔵や石馬像、灯籠なども多く、石造り文化が広く根付いています。

その理由の一つとしてあげられるのが、良質な石材の存在です。栃木県北端部から福島県南部には、羽鳥湖周辺から噴出した火砕流が堆積してできたとされる岩石の層があります。この石（デイサイト質凝灰岩）は、比較的やわらかく容易に加工できるため、幅広く利用されてきました。その呼称は地域によって異なり、白河市では「白河石」、那須町では「芦野石」、浅川町では「富貴作石」と呼ばれています。

そしてこの石に魅せられたとみられるのが、旅石工として現在の東白川郡周辺を訪れ浅川町に定住した小松利平です。利平の故郷である信州高遠（現在の長野県）では、藩が収入を増やすため長子以外の男子に石切りの技術を習得させ旅稼ぎさせることを推奨していました。利平が定住した理由は定かではなく名を刻んだ作品も見つ

かっていませんが、故郷の高遠藩を離れ移住したため連れ戻されないよう名を伏せたのではと推測されています。

優れた石工であった利平の技は、弟子であり小松家の養子とした寅吉へ、そして寅吉の一番弟子である小林和平へと受け継がれました。特に寅吉の卓越した技術は他の石工へも影響を与え、地域全体に芸術性の高い作品が残ることとなります。

狛犬は高貴なものを守るための神獣として、神社や仏閣の前に置かれます。前足を伸ばして腰を下ろした蹲踞（そんきょ）型が基本ですが、福島県県南地方では、獅子山型・飛翔獅子型などと通称される創意工夫されたものが数多くみられます。

特徴ある福島県県南地方の狛犬や神獣は、全国的にも徐々に注目度があがっており、見に来る人も増えています。狛犬の芸術性から発する神聖なパワーが人々の心を惹きつけているに違いありません。

福島ビエンナーレ 2020
「風月の芸術祭 in 白河」 出展作品



「山犬様
守護」



「山犬様
振り返り」



「山犬様
相思相愛」